

名前

問16 次の文章は、東京スカイツリーの開業を報じた新聞記事である。1文ごとに番号を振った①～⑤のうち、「事実*」ではない文の番号を書きなさい。(複数可)

※ここでは「事実」とは、客観的な裏付けのできる内容を指すものとする。

①2012年5月22日(火)、タワー世界一の高さ634メートルを誇る東京スカイツリー(東京都・墨田区)が開業した。②着工から3年10か月、述べ58万人が建設工事に携わった。③東日本大震災に耐え、優雅に空へと伸びるその姿に、いつしか被災者を含めて多くの国民が明日への希望を託す存在となった。④高度経済成長と共に歩んだ東京タワーに代わり、電波塔として重要な役割を担う。⑤さらに都心の間近に国内最大級の集客施設が誕生することで、海外の観光客も呼び込み、首都の人の流れを大きく変えそうだ。

問17 次の(1)(2)の文は、A「何について述べているか」、B「書き手の意図」はどういうものだととらえられるか、それぞれ適当なものを①～③から選びなさい。

(1) 最近の人は、自己表現や自己主張が強くなったのはいいが、ほかの人が話をしていても遮って自分の意見を声高に語りがちである。私は、ほかの人が話しているあいだは黙って聞くのが礼儀だと思っているのだが、そういうことでは時代について行けなくなるのだろうか。

- 【A】 ① 自己主張に控えめな人は時代に取り残される状況について
② 人を押しのけても自分が前に出ようとする風潮について
③ 人の話を聞くときの態度について

- 【B】 ① 自己表現するのはよいが、ほかの人の存在も尊重すべきだ。
② 人より前に出て行く姿勢がなければ生き残れない時代だ。
③ 最近は礼儀を知らない人がいるから礼儀教育が必要だ。

A		B	
---	--	---	--

(2) チェーン店が全国に店舗網を広げるようになったおかげで、消費者にとっての地域間格差が是正された面はたしかにある。どこに住んでいようと、同程度の品質の商品と同程度の値段で手に入れられるのだから、ありがたい。しかし、地域それぞれにあった特色は希薄になった。北から南までどこに行っても同じような店が並ぶ様子は、地域の個性や伝統が失われた寂しい景色として私には映る。

- 【A】 ① チェーン店の発展が消費者にもたらした利便性
② チェーン店の発展が地域の個性や伝統を融合させたことについて
③ チェーン店の発展が地域の個性を失わせたことについて

- 【B】 ① チェーン店の効用は認めるものの地域が失ったマイナスのほうが多い
② どこに暮らしても利便性が得られるようにしたチェーン店の貢献は大きい
③ 地域の個性や伝統を復活させなければならない

A		B	
---	--	---	--

問18 下記は、病院が入院の際に必要なものを連絡するために、配付している用紙です。これを用いて、入院予定者に対する「入院時の持ち物」を、わかりやすく説明しなさい。

入院時の持ちもの

1 入院当日受付で必要なもの

・入院申込書 ・診察券 ・健康保険証 ・印鑑

2 日用品

・箸 ・スプーン ・湯飲み ・ポットまたは水筒 ・歯ブラシ
・歯磨き粉 ・シャンプー ・石けん ・洗面器 ・下着
・くし ・タオル ・バスタオル ・ティッシュペーパー
・パジャマ ・スリッパ ・ひげ剃り（必要な方のみ）

3 その他

服用中のお薬や医師・看護師が指示したもの

- ★ 荷物は最小限にしてください。
- ★ 持ちものには、必ず名前を記入してください。
- ★ アレルギー発症を防止するため、生花の持ち込みは禁止とします。
- ★ 日用品は病院内のコンビニエンスストアでも販売しています。
- ★ 盗難防止のため、多額の現金や貴重品はお持ちにならないようにしてください。

【解答欄】

問19 次の文章を読んで、あとの問いに答えましょう。

からだはだれのものか。いのちはだれのものか。

安楽死の問題をめぐって、臓器移植をめぐって、人工中絶や出生前診断の是非をめぐって、このことがいつも問題になる。

そのとき、その問いはいつも個人の自由の問題とからめて論じられる。個人が自由であるとは、個人がその存在、その行動のあり方をみずからの意志で決定できる状態にあるということである。わたしの身体もわたしの生命もほかならぬこのわたしのものであって、この身体を本人の同意なしに他から傷つけられたり、その活動を強制されたりすることがあってはならないというのは、「基本的人権」という理念の核にある考え方であるといつてよい。

自殺の正当化にあたっては、献体の登録や臓器の提供にあたっては、その背景にあるのは同じ論理である。生きて死ぬのはほかならぬこのじぶんであるから死に方は本人が決めることができる、じぶんの身体はじぶんのものだからそれをどう処分しよう（美容整形しよう、身をひさごうと、体内の臓器を他人に譲渡しよう）他人にとやかく言われるすじあいはない……というわけである。

が、他方で、その同じ身体、同じ生命がけっしてじぶんだけのものでないことを、わたしたちは日々痛いほど感じている。ひとはじぶんの生命をじぶんで創りだしたわけではないし、じぶんの生命をじぶんで閉じることもできない。だれもじぶんでへその緒を切ることはできないし、じぶんで棺桶のなかに入ることもできないとは、しばしば言われることだ。だれしも他人の庇護のもとで育つ。他人にあれやこれやと世話されながら老いる。

身体や生命を、さらに広く「身」とか「身柄」というふうにとれば、家族生活をいとなむひと、いろいろな団体の運営責任を負う公的な立場にいるひとにとっては、じぶんの身体をじぶんだけのものだと感じるもののほうがむしろ稀だろう。

このずれはいったい何を意味しているのか。

ここで問題になるのは、冒頭に掲げたような、身体はだれのものか、生命はだれのものかという問いである。本人のものか、あるいは本人だけのものではないのか、それがいつも問われるが、しかしその背後にはさらに、身体や生命はそもそもだれかの所有される物なのだろうかという問題がある。

西洋の所有論は伝統的に、何かがじぶんのものであるという所有権の概念を、ものの可処分性（ディスポーザビリティ、つまり自分の意のままにいうこと）という概念に結びつけて考えてきた。これはわたしのものである、だからこれをどう処分するかはわたしが自由に決めることである、というわけだ。

が、この考え方の根にある考え、つまり、この身体はそれを生きているこのじぶんのものだという身体の自己所有権（セルフ・オーナーシップ）の考えには、ある保留がつけられねばならない。それは、身体がもしもろもろの物的対象のひとつだとするならばたしかにその所有権が云々できるだろうが、身体そのものはたして所有されるべき物的対象なのだろうか、という問題である。

生命についても同様のことがいえる。かつて生物学において、生命活動、とくに呼吸が燃焼の比喩で語りだされたように、生命というと、なにか生きものの内部にあって実体のように存在するものが考えられがちである。まるで生命の炎とでもいうべきものがあって、それがいつかふつと消えるかのように、だ。しかし生命は他人と共同で維持されるものであって、他人との関係から離れて生命というものはなりたない。食べ物ひとつ調達するのも、社会の大きな機構がはたらかなくなったら至難のことである。

生命を誰か特定個人の身体のうちに局所づけることはある意味で抽象的なことである。というのも、身体が純粋に物的な対象として現れるのは、それが他の身体との生きた関係を解除されたときだからである。ひとの身体と生命は、食や性、育児や介護の場面ひとつとってもわかるように、いつも他の身体とのまじわりややりとりのなかにあるのであって、特定の身体の座をもつ生命の行く末は、その生命を生きる者、その生命に与かるひとびとのものであるのだ。個人のその身体が死体となったとき、その生命とともに生きた者がその生命を亡きものとして認める、そういう行為をもってやっとひとつの命は終わるのだ。

いのちのもっとも基礎的な場面で、ひとはたがいのいのちを深く交えている。この交感がいのちのなかを流れている。

からだはだれのものか、いのちはだれのものか。これは、ひとがだれと生きてきたか、だれとともに生きつつあるかという問いとともに問われねばならない問題なのである。

出典：鷲田清一『死なないでいる理由』

A 20x10 grid is shown. A vertical line is drawn at the 10th column from the left. The grid is labeled with '300' on the right side and '400' at the bottom right corner.

問20 次の文章を読んで、(1)～(3)に答えなさい。

ビジョン、何とも響きのよい言葉だ。日本の政治家はビジョンを示せないから国民は不安になり消費が伸び悩んでいる、という風に使われる。たとえばカルロス・ゴーンが示す日産のビジョンは、この先三年で利益を出す、というものだ。たとえば政治家のビジョンというのは、いったいどういうものだろうか。

日本が近代工業国家になる前、政治家や官僚は、日本をどういう国にしていくか、国民はどう生きるべきかというビジョンを語ることが必要だった。

現代はどうだろうか。政治家や官僚は将来の日本のビジョンをどういう形で示すべきなのだろうか。わたしは、政治家や官僚には、日本人はどう生きるべきか、というようなビジョンではなく、より具体的な短期のビジョンと中長期のビジョンを示してもらいたい。それは短期的には、たとえば財政危機を回復するために具体的にどういった政策をとるのかといったようなことだ。あるいは中長期的には日本の教育や治安や安全保障を考えるとときに具体的にこれからどういう対策をとるのかというようなことだ。

現代においては、日本人はこれからどう生きるべきか、というようなビジョンを語れる人はいない。昔のように、つまり高度成長以前のように、日本人全員がある一つの生き方、ライフスタイルを目指しているわけではないからだ。

そして、日本人一人一人が、自分はどう生きるかを考えることが必要だとしたら、政治家や官僚は、さまざまな社会的セーフティネットを整備し、生き方の選択肢を示して、あとは放っておくべきだと思う。

(村上龍『「失われた10年」を問う』日本放送出版協会、2000年5月刊より抜粋)

- (1) この文章の段落ごとの要旨として不適切なものを、A～Eから選びなさい。

- A ビジョンという言葉は響きのいい言葉だ。
B 日本が近代工業国家になる前は、政治家や官僚は国のあり方や国民の生き方についてビジョンを語ることが必要だった。
C 現代の日本では、政治家や官僚には、日本人はどう生きるべきかというようなビジョンではなく、もっと具体的な短期と中長期のビジョンを示してもらいたい。
D 現代の日本人は、一つの生き方やライフスタイルを目指しているわけではない。
E 社会的セーフティネットを整備し、生き方の選択肢を示すことが政治家や官僚がすべきことで、どう生きるかの選択は国民に委ねるべきだと思う。

--

- (2) この文章の要約文を、100字以内で書きなさい。

[illegible]

- (3) この文章に対する批評文（あなたの意見を論理的に示した文）を 120 字以内で書きなさい。

[illegible]